【ウィズコロナのその先へ　~新時代の暮らしを支える県立図書館~】

〈資料ポジショニングシステム〉
　全ての資料にGPSのようなポジショニングシステムを導入する。システムは館内のみ有効で、資料の位置情報をコンピュータで瞬時に把握する事ができる。このシステムは館内のパソコンは勿論、個人のスマートフォンからもアクセスする事が可能で、誰でも資料の位置情報検索機能を利用できる。

　広い図書館の中で、目的の資料を素早く見つける事は容易ではない。私自身も、目当ての資料が特設コーナーに移動していて、探すのに苦戦した経験がある。特に絵本等は、館ごとに並び順が違う事も多い。作者名順の場合もあるが、大判のものは別の棚に収納されていたり、昔話のような名作は同じタイトルで集められていたりする事もある。児童書は、文庫シリーズを出版社ごとに固めていたりと、慣れない館で目的の資料を探す事は簡単ではない。
　実現には時間が掛かるかもしれないが、ポジショニングシステムによりコンピュータで全ての資料の位置情報の把握が可能になれば、職員の業務軽減は勿論、利用者の滞在時間を短縮する事で、新型コロナウイルス対策にも繋がっていく。
　また、資料の位置情報検索に外国語対応機能が導入されれば、より多くの人が図書館を利用し易くなるだろう。分類や作者名等、資料の探索に必要となる情報のほとんどは漢字で書かれており、現在の図書館で日本語を得意としない外国人が資料を見つける事は極めて困難だ。今後、更なるグローバル化が見込まれる日本において、外国語対応の機能は必要不可欠である。

〈県立オンライン図書館〉
　オリジナルアプリにより、オンラインでの図書館の利用を可能にする。県内に居住、または通勤・通学している人は利用者アカウントを作成する事ができ、アプリにログインする事で何処に居てもスマートフォン一つで図書館を利用する事ができる。

　オンラインで電子書籍の貸し出しを行えば、人気の資料も順番を待たずに直ぐに借りる事ができ、スマートフォンで資料にアクセスしていつでもどこでも読めるようになる。電子書籍であれば紛失や破損の心配もない。延長手続きをしない限り、返却期限日に資料が自動で返却されるシステムを採用すれば、図書館側も利用者側も安心だ。
　また、お気に入り作者の登録機能により、特定の作者の新着図書に関する通知を受け取る事ができれば、読書をより楽しめる。さらに、お気に入りジャンルを指定する事で、お薦めの資料が紹介される機能があれば、図書館を利用する機会も増えるはずだ。
　一方で、オンライン図書館に求められるのは利便性だけではない。アプリ内で、利用者同士の交流の場を設けたり、図書館のイベントを開催したりと、本来の図書館と変わらない役割も持ち続ける必要がある。利用者同士で資料に関するレビューを書き込む事ができれば、気になる資料の情報や読んだ人の感想を手軽に閲覧する事ができる。レビューに対するリプライ機能や、同じジャンルを好む利用者同士が集うトークルームがあれば、非接触で意見交換が可能になるだろう。図書館イベントのオンライン開催に関しては、動画による読み聞かせや、離れた場所を繋いで行うライブビブリオバトル等、直ぐに実現できる可能性が高いものもある。
　多くの人々が忙しい毎日を送る現代では、何よりも短時間で簡単に利用できるサービスが求められている。本来の図書館の機能を維持しつつ、より利用し易いオンライン図書館は、ウィズコロナ・アフターコロナの時代に必要とされる存在だ。

〈通信制高校との連携〉
　県内には数多くの通信制高校があるが、そのほとんどに本格的な図書室はない。学校や自宅近くに図書館がなくとも、沢山の本を読みたいと望む生徒達の為に、県立図書館が通信制高校に対して資料の貸し出しを行う。

　高校に在籍する期間は、生徒達が職業選択を行う大切な時期だ。家庭で多くの情報を得られる生徒ばかりではない為、様々な職業に関する資料は進路を決定する上で大いに参考になるだろう。また、学校の学習に役立つ資料を手軽に手に取る事ができれば、学びに対する関心を高めるきっかけにもなる。
　現在、生徒の個性を尊重し、多様性を認める環境に長けた通信制高校の需要が急速に高まっており、定員拡大等の措置を取る学校もある。通信制高校には、大学進学や就職等を見据える生徒や、仕事と学業の両立を目指す生徒、体調に問題を有する生徒等、様々な状況の生徒達が通っている。資料の貸し出しにより、彼らの学びをより豊かにする事で、新しい時代の教育を支援する事ができるのだ。

〈図書館を全ての人の〝居場所〟に〉
　図書館やその施設の一部を、誰もが気兼ねなく過ごせる〝居場所〟として提供する事で、地域に住む人々の暮らしを豊かにする。

　〝理由なく居られる場所〟こそ〝居場所〟だ。今、静岡の街に、特別な理由なく過ごせる場所はどれ程あるだろう。
　私は静岡市立御幸町図書館を頻繁に利用するのだが、いつ訪れても館内の椅子のほとんどは高齢者に占有されており、学習や読書に使用できる席は残されていない。特に現在は、新型コロナウイルスの影響で座席数が削減されており、立ったまま読むのが難しい大判の資料は、手に取るのを諦める事もしばしばだ。高齢者の多くは居眠りをしたり、ただ座っていたりと読書や調べ物をしている様子はない。私は、なぜこの様な現状があるのか、原因を考えてみた。
　御幸町図書館がある静岡市街地には、駿府城公園以外に、理由なく訪れる事ができ、ゆっくりと過ごせる静かな場所はほとんどない。公園は屋外の為、夏季や冬季に長時間過ごす事は難しい。その点、図書館は冷暖房が完備されており、長時間快適に滞在できる静かな場所として、高齢者に利用されるのだろう。少子高齢化が進む今、高齢者世帯全体に占める単身世帯の割合は急激に拡大しており、現在静岡県内では約14万人の高齢者が一人暮らしをしている。これは、65歳以上の県民の13%以上に当たる。2040年には高齢者世帯全体の45%が一人暮らしになるというデータもあり、現代社会において、孤独を抱える人や、居場所を探す人の憩いの場を提供する事は、公共施設の役割と言える。
　例えば、図書館を備えた施設のロビーやその一角に、ほっと一息付けるスペースや、座って団欒ができるコーナーを設置するだけでも人々は居場所を見つける事ができる。
　ヨーロッパでは、歩道をただ通行路として整備するのではなく、地域の人々の〝コミュニティ空間〟として活用している。ドイツのフランクフルトや、スイスのチューリッヒ、デンマークのヘアニング等が代表的で、日本の何倍も幅がある広い歩道の至る所に様々なデザインのベンチが設置されており、人々の出会いの場や憩いの場として親しまれているのだ。人々は理由が無くても気軽に腰掛け、誰かと話したり、ただゆっくりと街並みを眺めたりして過ごす。日本にこうした場はまだ少ない。今の日本に求められているのは、都市政策でもなく、福祉政策でもなく、それらを統合した、人と街を繋ぐ〝空間〟の提案なのかもしれない。これからは、生活の一部として何気なく利用できる人々の〝居場所〟を、図書館が提供していくのだ。
　一人で暮らしていても、毎日行ける場所がある、誰かに会える場所がある。それだけでどれ程心強いだろうか。普段から顔を合わせる人や言葉を交わす人が居れば、お互いの体調の変化に気付いたり、生活の不安を解消したりと、人々の安全を守る事にも繋がる。
　また、施設内に飲食可能なスペースがあれば、一人で食事をする事で感じる日々の孤独感を和らげる事ができる。私自身、一人で昼食を摂ろうとした際、街中を歩き回って探しても、お弁当を広げられる屋内のスペースが見つからなかった経験がある。施設内に食事ができる場所があれば、高齢者だけでなく、小さな子供を持つ親や、図書館の近くで働く人、地域の学校に通う学生等もより利用し易い空間になるだろう。
　これからの時代、更なる少子高齢化や核家族化が見込まれている。社会生活の中で孤独を感じ、暮らしに不安を覚える人が増えるかもしれない。ただ足を運ぶだけで「ひとりではない」と感じられる、全ての人の〝居場所〟を提供する事で、県立図書館は、新時代の暮らしを支える存在として新たな役割を担い、さらに可能性を広げていくだろう。